第九章　女三の宮の物語　懐妊と密通の露見

［第一段　女三の宮懐妊す］

　姫宮は、*あやしかりしことを思し嘆きしより（姫宮はあの異常だった密通を思い嘆きなさって以来）、やがて例のさまにもおはせず（そのまま平素の体調ではいらっしゃらず）、*悩ましくしたまへど（変調を来たしていらしたが）、おどろおどろしくはあらず（重い症状ということではありません。）、*立ちぬる月より（しかし先月から）、物きこし召さで（食が進みなさらず）、いたく*青みそこなはれたまふ（とても青ざめてやつれていらっしゃいます）。　*「あやし」は＜奇怪だ、珍しい、異常だ＞という形状形容の他に＜いぶかしい、見苦しい、不届きだ＞という心象形容の語用もあるらしい。姫宮の立場に立てば＜見苦しい、不届きだ＞あたりで、観察者の視点だと＜異常だ＞くらいに見える。下の文が心象に踏み込んでいるようなので、この文は外形的な説明を意としているのだろう。密通があったのは葵祭りに先立つ御禊の前日夜で、紫の上の一時心肺停止は葵祭りの翌日未明、という賀茂祭がらみだ。祭りがらみの姫事となると、私の年回りだと、ジーン・ピットニーの「ルイジアナ・ママ」（1962年）の日本語詞にあった「祭りがあったある晩に、あの子誘って二人きり、ダンスに行ったのさ」が頭を回る。詞を付けたのが漣健児で、歌ったのが飯田久彦、というのも何とも感慨深い。　*「悩まし」は＜体調が悪い、気分が悪い＞ということらしいが、この言い方で＜変調＝懐妊の兆し＞を言っているようにも見える。が、この時点では懐妊を明示してはいないようでもあり、体調の変化を病気なのか懐妊なのかまだ分からない状態を表現しているのかも知れないが、その認識次第でずいぶん文意も違ってくるので、とても面倒な文だ。　*「立ちぬる月」は、上の「六月になりてぞ」の文でこの六条院の話題に繋げているので、「先月」のことであり、つまり＜五月＞なのだろう。注には＜『集成』は「月が改まってこのかた」「柏木に逢ったのは四月であるから五月になってから」と注す。悪阻の症状が現れる。＞とある。五月、という結論は同じだが、『集成』は「立ちぬる」を「あやしかりしこと」から＜日が経った＞と読んで「立ちぬる月」を＜その翌月＞と言っているように聞こえるが、私は、そして恐らくは渋谷教授も、「六月になりてぞ」を受けた今から見て、「立ちぬる」を＜過ぎ去った＞と読んで「立ちぬる月」を＜先月＞と取る、という違いはある。　*「青みそこなはる」は、自動詞「青む（青くなる）」の連用形に他動詞「損ふ（やつれさせる）」が付いた複合動詞とは見做せない。受身の助動詞「る」は「そこなふ」の未然形だけに付いていて、「青み」は連用中止で此処で一旦文意を区切り、丁寧に書けば格助詞「て」を伴って「青みてそこなはる」という言い方なのだろう。そういう語用なので「青み」に独立した語感があるためか、一見＜未熟さ、若々しさ、瑞々しさ＞という形容名詞に見えて、それが「そこなはれたまふ」た状態なら＜若さを失った＞ということなのかと思い、それにしては変な言い方をするとも思ったが、「おどろおどろしくはあらず」で句点として、その後を「しかし」の逆接で受ければ、「青み、そこなはる」の文意を掴み易い。

　*かの人は（その問題の相手である藤君は）、わりなく*思ひあまる時々は（姫宮への執着がどうしても鎮められない度毎に）、*夢のやうに見たてまつりけれど（僅かな隙に夢のようにはかなくお会い申し上げたけれど）、宮、*尽きせずわりなきことに思したり（宮は藤君の忍び通いを以前と同様にずっと困ったこととお思いなさいます）。　*「かの人」は渋谷訳文では＜あの人＞と訳語が当てられている。「かの」の「か」は現代語の＜あれ＞に近い指示代名詞で＜近称の「こ」・中称の「そ」に対する遠称＞と古語辞典に説明がある。で、「かの」は現代語の＜あの＞に多くが該当するようにも説明されている。訳文は、その辞書の説明に則って、というか、文意を検討もせずに、辞書の用例をそのまま引用しているだけの手抜きに見える。現代語の「あの」は、それに代名される固有対象が、同一主題での話題展開に於いて既に示されている場合に、同一概念の対象体である事を示す為に、また固有名の重複で別概念との混同を避ける為にも、代名語用するもので、主題が変わった話で行き成り「あの」というのは対象が特定できず、不用意で唐突な語用になってしまう。尤も、その

固有対象が非常に強烈な存在である場合には、その特異さが共通認識されて、特別に「あの」で対象が特定できることはある。が、その場合には、その特異さを示す形容が修飾される。このように、単に「かの人」とは持ち出されない。つまり、この「かの人」は＜あの人＞という言い方ではない。ところで、現代語にも「彼の（かの）」という言い方はある。現代語の「かの」は＜例の＞とか＜懸案の＞という意味で、話の主題が変わっても、時間や空間的に同一背景にある問題として語り手と聞き手に共通認識されている事物を指し示す言い方だ。この意味での遠称語用は、当然に古語にもあるだろう。ただし、此処の「人」は文意からして＜藤君＞であり、現代語ではそれを明示するので、「かの人」は＜かの藤君＞ということになる。　*「思ひあまる」は「手に余る」に通じる語感。「わりなく」は＜理も通じず＝どうしても＞だから、「わりなく思ひあまる」は自分では頭や気持が整理できずに＜何かの行動に出る＞事を示す言い方であり、その「行動」とは＜密通＞に他ならない。しかも、それが「ときどき」と複数回であり、日常化とは言えないまでも、常態化しつつあるような口ぶりだ。どんなに常軌を逸した事態も突発事故であれば止むを得ない。が、その常軌を逸した事態が繰返されれば、それは既成事実として当事者同士が関係性を認めた、少なくも許容したことになってくる。もし自分で望んでいなくても、絶対に拒否を貫なかなければ、宮は強姦の被害者ではなく、不倫の共犯者になってしまう。是は非常に重大な文だ。　*「夢のよう」は＜全てが満たされた理想どおりのさま＞か＜短く過ぎたはかないさま＞をいう言い方だ。しかし、いくら何でも藤君がこの危うさを＜理想どおり＞と思うほど癖の強い人物とは思えないし、また六条院に忍び通う客観的な困難さから見て、長居は出来ずに僅かな隙を窺って会ったのだろうから、この「夢のように」は＜ごく短時間で夢のようにはかなく＞なのだろう。注には、此処の文を＜『完訳』は「夢路を通うような思いで宮にお逢い申していたのであったが」「密会は一度ならず繰り返された」と注す。＞としてあるが、あまり説得力を感じない。密会の繰り返しについては、むしろ「時々」に注すべきだ。　*「尽きせぬ」は＜いつまでも変わらない＞と古語辞典にある。この「わりなし」は＜どうにも困る＞で、宮は相変わらず藤君を歓迎していないようだ。少しも恋情が無いのだろうか。いや、問題はそれなら何故に藤君に会う隙を与えるのか、ということだ。手引きした小侍従を叱り付け遠ざけるなり、場合によっては事の露見を避けながら事態を収拾すべく親身の乳母に相談するとか、何か自主的な手立てを講じなければ可変しい。それが、藤君に度々会う隙を与えるとは、むしろ小侍従に以前に増して裁量権を与えて重用しているようにも勘繰られる。宮にとって小侍従が最も身近な存在で、それ以上の相談相手が居なかった、ということはあるのかも知れない。しかし、ことは自分の身の生死にも関わる重大事項だ。本気で自分の心情を訴える、ということがあれば、諾々と既成事実が積み上がるのは避けられただろう。それほどに自己表現が出来ない宮だったのか。意外と有り勝ちな依存関係にも見えるが、内親王の人生もこんなものかと思えば、是を読む宮廷女房たちの冷徹な生活感に背筋も凍る。

　院をいみじく懼ぢきこえたまへる御心に（宮は罪悪感から源氏殿をとても恐れ申しなさるお気持ちの上に）、ありさまも人のほども（藤君の容姿も身分も）、等しくだにやはある（殿に匹敵するべくも無くて）、いたくよしめきなまめきたれば（とても教養があり優雅で）、*おほかたの人目にこそ（普通の女の目で見れば）、なべての人には優りてめでらるれ（抜き出て優れていると褒められる所だろうが）、幼くより（年少にして）、*さるたぐひなき御ありさまに馴らひたまへる御心には（殿ほどの類無い御人に親しんでいらっしゃる宮の基準では）、めざましくのみ見たまふほどに（藤君は無礼者とばかり思えるので）、かく*悩みわたりたまふは（このように変調が続いて御懐妊の兆しがあるのは）、あはれなる御宿世にぞありける（かなしい御宿命ではありました）。　*「おほかたの人目にこそ」とは言うが、召人のくせに藤君の愛人気取りでいる小侍従を皮肉っている作者の意図を当時の読者は感じたに違いない、ように私には思える。少なくも小侍従は藤君を褒めていただろうし、だから手引きを続けたのだろうし、宮はそれを拒否できなかったのだろうし、その宮の気持を語り手が代弁しているかの印象だ。　*「さる」は＜左様なる＞で「院」とは即ち＜六条院源氏殿＞を示す。　*「悩みわたる」は＜体調を崩し続ける＞という言

い方に見えるが、そのことが「あはれなる御宿世」だという考え方は、この「悩み」が＜懐妊による体調変化＝ツワリ＞である事を意味する。それでも、こういう言い方をしているのだから「懐妊」という語を明示すべきかどうかは迷うが、語り手たる側女房の認識としては＜懐妊＞をはっきり承知している事が示されている訳なので、文意の紛らわしさを避けるために明示の補語をして置く。

御乳母たち見たてまつり*とがめて（宮の乳母たちはこうした宮のご体調を拝し申し上げて御懐妊と気付き）、院の渡らせたまふこともいとたまさかになるを（殿が宮のお部屋にお見えあそばすこともごく稀になっている事を）、つぶやき恨みたてまつる（蔭ながら薄情なと不平申し上げます）。　*「咎む」は＜非難する、責める、問いただす＞という意味の語のようだが、此処では宮を「見たてまつり」たのだから＜問いただす＞と言っても、本人に詰問出来よう筈もない。「とがむ」を＜「解く」（が）方に気が向かう＞という語感だとすれば、事態の真相や原因を究明したいと思って、追及すべく＜観察して＞みれば、今までの知見からして「御乳母たち」は宮の状態を＜懐妊と判じた＞ということらしく、だから殿の薄情さを「恨みたてまつる」ことになる、という文筋になっているようだ。つまり、この「とがむ」は＜懐妊に気付く＞だが、どうしてこんなに分かり難い言い方をするのか、が寧ろ分からない。乳母たちが、藤君との密通には気付いていない、ということまで作者が説明しようとしているからなのだろうか。しかし、不義の露見は重大事件なので、それがあれば必ず話は別の展開を見せる筈で、特にそうした展開が無ければ秘匿は守られていることが話の前提になっている、と受け止めて読んでいるので、宮の御懐妊は小侍従以外の女房には、当然に源氏殿の御子と認識される、かと思われ、いや、その事も含めた説明があっても然るべきでさえあり、全体にもっと分かり易い書き方はありそうだと思えてならない。ただ、事の秘匿が守られた、ということ自体が、そんなにすんなりと納得できるものでも実は無い。密通を知る者は、当事者の宮と藤君の他には小侍従だけ、という書き方になってはいても、貴人たる宮と藤君には必ず用人が付き従っているのであり、特に秘密の事柄の場合には限られた腹心の数名にはなるだろうか、その数名は部分的にでも事実を知っているのだ。勿論、それらの数名は絶対に口を割らない蔭の忍者だから腹心なので、貴人社会では独立の個人とは認識されない存在、ということではあるのだろうが、実際に存在している個人であることも事実だ。また、宮にとって小侍従は外形上はその腹心の配下に当たるわけだが、内実では宮に統治力が無いので、宮側の腹心は実際には上臈の小侍従に従う下臈や下人だったのだろうが、これが藤君の従者に比べて甚だ頼り無い印象を私は受ける。いや、小侍従が差配する下位女房ということは、これまでの藤君と朱雀院との長期の関わりからすれば藤君の息が掛かった者、と考えるべきかも知れないが、それでも大元の人事権が宮にあるという不安は払拭できない。で、そうした小侍従や下臈たちの動きから、乳母の誰かが宮の動向に不審を抱く、藤君との密通に気付く、ということがあってもおかしくない。というか、藤君が六条院の寝殿母屋に忍び込むということに、最初の御禊前日の女房たちが数多く近くに居そうな描写からして、とても危うい印象を私は受けていて、むしろ密通が可能だった具体的な状況が不思議に思えるほどだ。

*かく悩みたまふと聞こし召してぞ*渡りたまふ（殿は宮がこのように不調でいらっしゃるとお聞きになったので、しばらく遠退いていらした六条院にお出向きなさることになります）。　*「かく悩みたまふ」は注に＜宮が懐妊のため苦しんでいるということ。＞とある。が、この時点では＜懐妊の兆し＞と明言して伝えられたのではなさそうで、あくまで＜不調でいらっしゃる＞ということで、殿に様子を見に見舞って欲しい、という言い方を女房たちはしたようだ。宮の乳母たちはほぼ御懐妊だろうと察しているが、今のような確実な検査法があるわけでもないので、もう少し日が経ってはっきりと腹ぼてになるまでは、その可能性があるとしか言えないだろうし、それも軽々に伝言すべき事柄でも無いので、心配なほどに＜不調だ＞と訴えて殿のお越しを待つ他は無いのだろう。しかし、そうした混み入った事情を「悩み」という当時の現代語の一点張りの、詳しく言わなくても分かるでしょ、みたいなノリで語られても、私のような者にはいちいち理屈を考えないと文意がつかめない。

実際、この「悩み」を＜病気＞と見るか＜妊娠＞と見るかは、非常に文意を異にする。だから、それを如何考えたかを示す補語の明示は現代語の言い換えには不可欠であり、その明示を避けた言い換え文は現代語には成っていない。*「渡りたまふ」は理由強調の係助詞「ぞ」を受けて連体形で結んでいる、ということのようだ。が、「ぞ」を受ける文末の活用語は連体形で結ぶ、という古語辞典の説明も舌足らずに見える。文末が形式的に連体形で結ぶ、というのは実用例示としては正しいのだろうが、意味としてはむしろ逆で、「ぞ」と強調することで説明文型が認識されるので、本来あるべき結論以外の定型化修辞の表示語用が省略できる、のではないだろうか。例えばこの文を「ぞ」を使わずに示せば＜かく悩みたまふと聞こし召して渡りたまふものならむ＞とかになるのだろう。で、この説明文は前段末の「なほ、いとゆゆしくて、六条の院にはあからさまにもえ渡りたまはず」を受けた言い方になっているものと読んで、そのように補語してみたい。というのも、この「渡りたまふ」を終止形の文として読むと、文意は＜お出向きなさいます＞となって、そういう話の展開なら以下の文は六条院が舞台となるはずだが、続く文の舞台は二条院のままのようで、非常に紛らわしい。尤も、此れが「ぞ」を使っていない文だとしても、「渡りたまふ」という言い方はその意味が、これから移動するということなのか、今が移動中なのか、既に移動したのか、が前後の文脈によって変わるような印象が以前からある語で、面倒な言い方だ。

*女君は(幾らか落ち着いた夫人の紫の上は)、暑くむつかしとて(六月の陽気が暑苦しいということで)、御髪澄まして(御髪を洗って)、すこしさはやかにもてなしたまへり(少しさっぱりとなさっていらっしゃいました)。　*「女君」は＜紫の上をいう。＞と注にある。雑感した時に私は、てっきり話が六条院に移っていると思って、いきなり宮との閨の場面の話なのかと思ったが、訳文と注を見て、まだ話は二条院を舞台にしていると知らされて少し戸惑った。それというのも、上文の「渡りたまふ」に釣られたためで、改めて「渡りたまふ」を読み直すことになり、前項ノートを記した次第。そういえば、閨の場面の相手が宮なら「女君」ではなく＜女宮＞になるのか。だから「女君」とあることで、逆にこれが二条院の話だと分かる、とかいうこともあるのかも知れない。が、それにしても、在家とは言え五戒の行を受けて仏道に帰依したであろう紫の上を「女君」と呼ぶことに問題は無いのだろうか。それが問題ないとしても、生き返ったばかりの人を「女君」と呼ぶことに私は何か意外性を感じる。その意外性も話を読み違えた原因の一つだ。ただ逆に、ずいぶん持ち直したらしいことは、この日常的な親しさを示す「女君」という言い方から汲めるのかも知れない。であれば、上文までが長めの括弧文と見做せるので、前段の「六月になりてぞ、時々御頭もたげたまひける」が此処に繋がると読んでみたい。で、そこまで補語しないと私自身が落ち着かないので、如何にも身勝手ながら饒舌に補語する。

臥しながらうちやりたまへりしかば(横になったまま御髪も下していらしたので)、とみにも乾かねど(直ぐには乾かないが)、*つゆばかりうちふくみ＜少しだけ膨らみを見せて＞、まよふ筋もなくて(ほつれ毛も無くて)、いときよらにゆらゆらとして(とても清らかに揺らぐ面白さを見せていて)、*青み衰へたまへるしも(青ざめて痩せていらしたが)、色は*真青に白くうつくしげに(見た目は青白い美しさで)、透きたるやうに見ゆる御肌つきなど(透き通って見える御肌の具合などは)、世になくらうたげなり(またとなくいたわしい)。もぬけたる虫の殼などのやうに(虫の脱け殻のように)、まだいとただよはしげにおはす(まだとても頼り無い感じでいらっしゃいます)。　*「つゆばかり」は＜少しだけ＞という言い方で、それ自体では打消しの副詞ではなく、下に打消語を伴えば＜少しも～でない＞という意味になる、というものだとすれば、この「つゆばかりうちふくみ」は＜少しも打ち含んだり＞ではなく＜少しだけ打ち含んで＞と言っていることになる。「打ち含む」は＜たまたま膨らみを見せた状態←張が有る＞という弾性のある若々しさを示すもので、年老いた、まして病床で痩せ衰えた弱弱しさ、とは反する形容で、だからこそ回復ぶりを示す描写になっている、かと思う。　*「青み」以降は御髪のことから外れて、「御肌つき(肌具合)」の形容になるらしい。非常に紛らわしい書き方だ。　*「真青」は「さを」と読みがある。「さを」は＜青

＞のことで＜「さ」は接頭語。「さあを」の約＞と古語辞典に説明がある。言葉の成り立ちは「真青（マッサオ）」や「真赤（マッカ）」という「真（まさに）」を接頭語にしたものとは違うのかも知れないが、「真」も「さ」も強調の接頭語に違いが無いので、意味としては＜マッサオ＞と同じだろう。因みに、真っ赤は濃い赤色でもあり、紅潮した生気ある表情でもあり、真っ青は濃い青色でもあり、蒼褪めた元気の無い表情でもある。なお、「色」も＜色合い、色調＞であると共に＜表情、状態＞であるのは現代語も変わらない。

*年ごろ住みたまはで（この数年はお住みにならず）、すこし荒れたりつる院の内（手入れが行き届かなかったので、少し荒れてしまっていた二条院の庭は）、*たとしへなく狭げにさへ見ゆ（六条院とは比べようも無いほどに狭く見えます）。　*六条院完成は十二年前の夏で、その秋には上も二条院から六条院に引っ越した。紫の上が今で 37 歳だとすると、25 歳の時の事だったことになる。　*「たとしへなく狭げ」とは言うが、二条院の庭も桐壺巻三章八段に「里の殿（さとのとの、故桐壺更衣の実家、故大納言邸）は（の方は）、修理職（しゅりしき、大工）、内匠寮（たくみづかさ、飾職）に宣旨下りて（帝の命によって）、二なう（になう、二つと無いまで立派に）改め造らせたまふ。もとの木立、山のたたずまひ（築山の様子）、おもしろき（既に趣ある）所なりけるを、池の心広く（こころひろく、以前より広めに）しなして（してあって）、めでたく造り（立派な造営だと）ののしる（評判が高い）。「かかる所に（こんなところに）思ふやうならむ人を（意中の人を）据ゑて（迎えて）住まばや（住みたいものだ）」とのみ（と源氏は屋敷を眺めては、そんなことばかり）、嘆かしう思しわたる（思って嘆いていた）。」とある立派なものだった。尤も、それは源氏殿 12 歳の元服の時のことで、上が 2 歳かせいぜい 4 歳の時という、35 年も前の話ではあったが。

昨日今日かくものおぼえたまふ隙にて（昨日や今日ばかりのこうして少し持ち直しなさった僅かな隙を見て）、心ことにつくろはれたる遣水、前栽の（心を込めて手入れされた遺水や前庭の草花が）、うちつけに心地よげなるを見出だしたまひても（当たり前のように気持ち良さそうにしているのを御覧になっても）、あはれに、今まで経にけるを思ほす（紫の上は殿の流離を此処で寂しく待ち暮らした若かった時のことや、栄華に満ちた六条院の華やかな暮らしぶりなどを感慨深く回想なさって、人生の幸せとは何なのかと今に至る時の流れをお思いになります）。

［第二段　源氏、紫の上と和歌を唱和す］

池はいと涼しげにて、蓮（はちす）の花の咲きわたれるに、葉はいと青やかにて、露きらきらと玉のやうに見えわたるを、

「かれ見たまへ（あれを御覧なさい）。おのれ一人も涼しげなるかな（自分だけ涼しそうにしてますよ）」

とのたまふに（と仰る殿の言葉に）、起き上がりて見出だしたまへるも（紫の上が起き上がって池の蓮を御覧なさることも）、いとめづらしければ（本当に久しぶりで）、

「かくて見たてまつる*こそ（こうしているあなたを見申し上げることが出来るのは）、夢の心地すれ（夢のようです）。いみじく（一時は深刻な事態で）、わが身さへ限りとおぼゆる折々のありしはや（私自身まで死んでしまうかと思われた時が何度もあったのですから）」　*「～こそ夢の心地すれ」は＜～出来るのは夢のようだ＞という定型句、のようなものだろう。理屈で言えば、「こそ」は「夢の心地」を強調する係助詞で、「夢の心地」が＜願望の達成感＝事の成就＝実現可能＞を示している。

と、涙を浮けてのたまへば(と殿が涙を浮かべて仰ると)、みづからもあはれに思して(上自身も感じ入って)、

「消え止まるほどやは経べき、たまさかに蓮の露のかかるばかりを」(和歌 35-13)

「思いがけなく晴れた日に、池の蓮が綺麗だわ」(意訳 35-13)

*注に＜紫の上の詠歌。「消え」と「露」と「かかる」は縁語。「玉」と「露」も縁語。「たまさかに」に「玉」の音を響かす。「かかる」は「かくある」の縮と掛詞。わが命のはかなさを露の消え残る間に喩えて詠む。＞とある。縁語使用の巧みさと流暢な注釈の説明から推し量るに、似たような詠み歌は数多く在るのだろう。それでも、この場面の設定は上手い演出に思える。「ほどやは経(ふ)べき」の「べし」の可能性を、「ほどやは」の「やは」で＜その間くらいは生きていられるだろうか＞という疑問形の願望に表現していて、「かかるばかり」の切実さを池の蓮の露の情緒に似せて訴える、という分かり易さは、私のような者でも感心するほどの見事なスチル写真だ。

とのたまふ(とお詠みになります。殿のご返歌はこうありました)。

「契り置かむ、この世ならでも蓮葉に玉ゐる露の心隔つな」(和歌 35-14)

「花が散るとき、蝶が死ぬ」(和歌 35-14)

*注に＜源氏の返歌。紫の上の「蓮」「玉」「露」の語句を用いる。「消え止まる」の語句を「契り置かむ」と切り返す。この世のみならず来世までの永遠の愛を誓う。＞とある。「はちすばに偶居る露の心」とは＜源氏殿の紫上への恋情＞で、それを永久に誓う自分を「隔つな」というのは＜忘れてくれるな＞ではなく＜一緒に死のう＞ということなのだろう。「花と蝶」(昭和 43、1968 年)ならぬ「蓮と露」と言ったところか。「花が女か、男が蝶か」の歌い出しは相当にエロで、任侠物の曲調が激しい性交を示唆する、という制作陣の思惑が当たって長期ヒットした、と記憶する。ただ、この曲は付け焼刃の思い付きで出来上がったもの、では無さそうだ。特に作詞をした川内康範という人は任侠道や性行動の暴力性こそが情念の発現と見据えていたらしく、情念に訴えるものが歌だとすれば、確かにその感性が時代に合っていたのか、ヒット曲を数多く売ったようだ。いや話が少し逸れたようが、何が言いたいかと言えば、この源氏殿の歌も情念であり「花と蝶」に通じる、ということだ。確かに、情念は歌になるのだろうが、歌は情念だけではない。というか、時代が変われば人の気持も変わる。まして、その時代を変えたのが殿本人だとすれば、こういう詠み方は紫の上にはもう重過ぎるのではないか、と私には思える。源氏殿が本当にオジサンに見える歌、という印象を作者が企画した、かの印象。

出でたまふ方ざまはもの憂けれど(お出向きなさる姫宮のお見舞いは、紫の上のこのような病状を思えば気が進まなかったが)、内裏にも院にも(帝におかせられても朱雀院におかれても)、聞こし召さむところあり(宮の御不調はお聞き付けなさる所でもあり)、悩みたまふと聞きてもほど経ぬるを(気分が優れなさらないと聞いてから時間が経ったのに)、目に近きに心を惑はしつるほど(目近の重病人の看病に心を砕いている内に)、見たてまつることもをさをさなかりつるに(御見舞い申し上げることも全く無かったので)、*かかる雲間にさへやは絶え籠もらむと(このように気候も上の病状も幾らか日が差す日和にまで門を閉ざして籠もっていてはいけないと)、思し立ちて、渡りたまひぬ(思い立って、六条院にお出掛けなさいます)。　*「かかる雲間にさへやは絶え籠もらむと」は注に＜源氏の心中。「雲間」は天候状態と紫の上の小康状態を譬喩的にさす。＞とある。「譬喩

的にさす」表現に水を差すのは忍び無いが、私はこの文のあまりにも過剰な伏語に嫌気していることを示す意味でも、あえて明示の補語をして置きたい。また、此処での「やは」の反語語用は「絶え籠もらむ」という明確な意志表示に対するものなので、言い換えもはっきりと＜してはいけない＞と言って置きたい。

［第三段　源氏、女三の宮を見舞う］

　宮は、*御心の鬼に（宮は背徳の後ろめたさから）、見えたてまつらむも恥づかしう（殿に御会い申し上げるのも気が引けて）、つつましく思すに（恐ろしくお思いなので）、物など聞こえたまふ御いらへも（お具合などについての殿のお尋ねのお応えも）、聞こえたまはねば（申し上げなさらないので）、日ごろの積もりを（近頃重なったご無沙汰を）、さすがにさりげなくてつらしと思しけると（さすがに薄情で情けないとお思いなのだと）、心苦しければ（殿は気まずくて）、とかくこしらへきこえたまふ（何かと慰め言葉を申して場を繕いなさいます）。　*「心の鬼」は＜良心の呵責＞と訳がある。良心が責められる思い、とは、相手に済まない思い、かと思うが、その背景はさまざまだ。自分が負うべき罪を不当に免れている、とか、相手の災難を見過ごす、とか、で要するに自分の利を図る事を優先したり正当化したりする身勝手、のようなものに思うが、そこに悪意の自覚も幾分はある気がする。しかし、宮に悪意の自覚は在るのだろうか。在っても希薄だったような印象だ。確かに、都合の悪いことをしてしまって殿に申し訳ない、悪い事をした、という＜罪の負い目＞は感じていて、とても打ち明けられることではないものの、積極的に＜悪意を持って＞秘匿しようという意識は低く、事態自体はむしろ被害者意識さえあるほどで、良心の呵責に苛まれる、というよりは、単に露見を恐れる＜背徳への恐怖＞だったように思う。

　大人びたる人召して（しかしそれでも宮は何のお応えも無く様子が分からないので、殿は事情を承知していそうな年配の女房を呼び寄せて）、御心地のさまなど問ひたまふ（宮のお加減具合などをお尋ねになります）。

　「*例のさまならぬ御心地になむ（御懐妊の御様子なのです）」　*注に＜女房の詞。妊娠のことをいう。＞とある。「例のさまならぬ御心地（みここち）」は一般的には＜いつもと違う御様子＞くらいで、体調に関してでも＜平常ではない御加減＞という言い方だ。しかし、妊娠の兆候は今でも「普通じゃない感じ」とか言う。機能不全という意味の病気ではないが、機能変化という大変な作用が女体の体内に起きている、ということでは確かに「悩み」であり「わづらひ」なのだろう。だから、是はこの時代や貴族社会に限った隠語というものでもなく、この時代の王朝物語ならではの伏語でもなく、恐らくは日本語特有の言い方でもなく、ありのままに妊娠の兆候を示す言い方ではありそうだ。で、女房が宮の状態を妊娠だと気付いたことは確かで、その心算で殿に報告しているのも間違いないだろう。が、問題は、この言い方で殿が何処まで宮の妊娠を認識したのか、が判然としないことだ。それでも注に従い、「例のさまならぬ御心地」は少なくも明確に「妊娠のこと」として伝わった、と読んで置く。

　と（と女房は）、わづらひたまふ御ありさまを聞こゆ（宮が不調でいらっしゃる御様子を申し上げます）。

　「*あやしくほど経てめづらしき御ことにも（宮の御懐妊とは、情交から弥に時間が経ってからツワリが出るという珍しい御変調にもあるものだ）」　*「あやしく」で句点があり、一文とする渋谷校訂で、訳は＜妙だな。＞とある。そして、「ほど経て」を＜今になって＞と言い換えてあって、是は＜今になって懐妊とは＞という文意だろうが、だとしても「今」とは何処を基準にしているのか、唐突な言い換えに見える。なお、注

には此処の文について＜源氏の詞。「あるかな」などの語句を言いさした形。「めづらしき御事」は妊娠をさす。無感動の発言。「とばかりのたまひて」という、無表情の振る舞い。＞とあり、この指摘は興味深いが、校訂の妥当性を説明してはいない。改めてこの文を見直せば、「あやしく」はシク活用の形容詞「あやし(奇妙だ、異常だ、ただならない、変だ)」の連用形なので、普通なら「程経(ほどふ、時が経つ)」の具合を形容して「あやしくほど経て」で＜弥に時間を置いて＞という言い方をしているように見える。「弥に」とは女房が言った「例のさまならぬ御心地」を受けているので＜懐妊とは＞を前に付けた言い方だが、その文意は＜もう何ヶ月も情交していないのに＞だ。女房の目には、藤君の密通から程無い四月の葵祭りの前日に、久しぶりに源氏殿のお渡りがあったので、それというのも藤君の狼藉に宮が狼狽して寝込んでいたのを心配した女房たちが殿の見舞いを願い出た為だが、その時に情交があれば、その時に受精があり五月過ぎのツワリが出る計算に符号したのだろう。が、殿は上の状態が心配でならず、宮を放っても置けないので見舞ったものの、とても情交に及ぶ気分ではなかったようで、七章八段のその場面の描写に「おのづから(だから今日はとてもあなたを抱いて差し上げる気分にはなれませんが、私のあなたへの愛情のほどは自然と)、このほど過ぎば(この時期が過ぎれば)、見直したまひてむ(お分かり頂けるでしょう)」と殿が宮に言い訳していたように、コトに及んでいなかったので、となると、最も近い情交でも「正月二十日ばかり」(四章一段)の女楽以前のことになり、半年近くになった＜今になってツワリが出る＞のは当事者の実感としては計算が合わない、という文意になる。この読み方の方が、「ほど経て」を＜今になって＞と読むよりは、よほど素直なのではないか。念のために写本画像サイトを当たったが、当該箇所は東京国立博物館本(104/151)では「あやしくほとへ手めつらしき御ことにもとはか里の給て」、京都大学本(p. 182)では「あやしくほとへてめつらしき御事にもとハかりの給て」、とあるように見えて、例によって、良く分からないものの、「あやしく。」の校訂を絶対視しなくても良いのだろう、と強行する。

とばかりのたまひて(とだけ仰って)、御心のうちには(殿は御内心では)、

「*年ごろ経ぬる人びとだにもさることなきを(長年連れ添ってきた他の妻たちでさえも情交から間を置いたそうした不順な妊娠は無かったのに)、*不定なる御事にもや(計算の合わない御体調であることだ)」　*「年ごろ経ぬる人びと」は注に＜以下「御ことにもや」まで、源氏の心中。女三の宮が源氏に降嫁して七年たつ。「人びと」は、源氏の妻たちをさす。＞とある。　*「不定(ふぢゃう)」は＜確かでないこと、意外なこと＞と古語辞典にあるが、此処では端的に＜計算が合わない妊娠＞という意味だろう。この文について、注には＜「もや」連語、係助詞「も」＋係助詞「や」疑問の意。危ぶむ気持ちを表す。下に「ある」連体形を省略した形。女三の宮の懐妊に期待や関心もない。＞とある。「期待や関心もない」というのは、宮への愛情があまり深くないとか、殿自身の年回りからして政略性に執着が薄いとかいう点では当たっている面もあるのかも知れず、その意味では面白い指摘だが、宮は紛れも無く王家血筋ではあり、それで無くても、子供は授かりものという絶対的な存在を考えれば如何にも言い過ぎで、「不定なる御事にもや」の言い方としては妊娠自体を疑っている、または下に「うち悩みたまへるさまのいとらうたげなるを、あはれと見たてまつりたまふ」とあるので、別の病気ではないかと心配している、という怪訝さや不思議さを感じている、と見るのが妥当だろう。

と思せば(と不思議にお思いになったので)、ことにともかくものたまひあへしらひたまはで(特にあれこれと仰ったり指図も為さらずに)、ただ、うち悩みたまへるさまのいとらうたげなるを(ただ御不調でいらっしゃる宮のお姿のとても御いたわしいのを)、あはれと見たてまつりたまふ(可哀相にお思いなさいます)。

からうして思し立ちて渡りたまひしかば(気乗りもしないまま止む無く思い立ちなさってお越しなさったものの)、ふともえ帰りたまはで(とても直ぐには二条院にお帰りになれず)、二、三日おはするほど(六条院に二、三日いらっしゃる間に)、「いかに、いかに(どういう具合だろうか)」とうしろめたく思さるれば(と紫の上の病状が案じられなさって)、御文をのみ書き尽くしたまふ(殿はお手紙を書くことにだけ没頭なさっていらっしゃいます)。

「いつの間に積もる御言の葉にかあらむ(ほんの一日二日離れていらっしゃるだけなのに、いつの間にあんなに積もる御言葉があるんでしょうかねぇ)。いでや(困ったものです)、やすからぬ世をも見るかな(先が思い遣られます)」

と、*若君の御過ちを知らぬ人は言ふ(と若妻の御過ちを知らぬ女房は宮の御処遇を心配して言います)。*侍従ぞ(侍従だけは)、*かかるにつけても胸うち騒ぎける(その心配も密通の露見の危惧という別の意味で内心胸騒ぎしていたのです)。　*「若君」については、注に＜女三の宮をいう。『完訳』は「宮の、幼稚さをこめた呼称」と注す。＞とある。宮については、閨での場面にも「女宮」とあったかと思うが、この「若君」は＜若い女君＞みたいな語感が有って、確かに何か今までとは違う印象を受ける言い方だ。　*「侍従」は＜小侍従＞のことだろうに、やはりこの若女房は格上げの待遇になったのだろうか。それとも、あまり「小」に拘りが無い作者の語用なのだろうか。是も変化と言えば変化だ。　*「かかる」は、女房が陰口を叩くのを侍従が不穏に思ったのだろうかと意味が掴み難かったが、与謝野訳文には＜小侍従は院の御滞留の間を無事に過ごしうるかと胸をとどろかせていた＞と此処の文意を示してあって、やっと気付いた。つまり是は、他の女房が言った「やすからぬ世をも見るかな」は＜殿の薄情さが宮の行く末に心配だ＞という意味だが、それを＜先々に密通の露見が心配だ＞という意味に侍従は思った、という掛詞の洒落語用になっている、という文らしい。事の重大さに比して作者の軽妙さが意外な所為か、私には少し分かり難い洒落っ気だ。そう言えば、藤君の密通に及ぶ、小侍従を呼び寄せた場面からの展開は少なからず滑稽譚の趣が有った。元々、この話は庶民が窺い知れない王朝内部の暴露話というイカガワシサがある所為か、外へ漏れてもどうせ絵空事で済む算段だったのか、チョットぶっ飛んだ感性で書かれているのかも知れない。

*かの人も(かの藤君も)、かく渡りたまへりと聞くに(このように殿が六条院にお出でになったと聞くと)、*おほけなく心誤りして(身の程も弁えず嫉妬に狂って)、いみじきことどもを書き続けて(切実な恋情を書き続けて)、おこせたまへり(宮に文を寄越しなさいました)。　*「かの人」は衛門督兼中納言の、そして何より宮の密通の相手である＜藤君＞なのだろう。侍従の登場で話が密通の話題に動くという運びの語り口のようで、その流れに乗った「かの人」という言い方のようだが、私の感性では是が必ずしも誰とは特定人物を認識し難い言い方に聞こえて、今ひとつ語り手の呼吸に馴染めない。　*「おほけなし」は＜身の程を弁えない、分不相応な＞と古語辞典にある。訳文にある＜大それた＞も妥当に見える。が、「心誤り」は古語辞典に＜狂乱＞とあり、渋谷訳文の＜考え違い＞よりは与謝野訳文の＜嫉妬＞の方が説得力がある。因みに、現代語の＜考え違い、思い違い、心得違い＞に近い古語としては「心過ち」があるようだ。

対に*あからさまに渡りたまへるほどに(殿が東の対に少しの間お出でになっていらっしゃる時に)、*人間なりければ(他の女房が居なくなったので)、忍びて見せたてまつる(侍従は藤君のお手紙を宮にこっそりお見せ申し上げます)。　*「あからさま」は＜少しの間＞。　*「人間(ひとま)」は＜人少な＞ともあるが＜人の気付かぬ隙＞とも古語辞典にある。

「むつかしきもの*見するこそ(面倒なものを見せるというのは)、いと心憂けれ(とても辛くなります)。*心地のいとど悪しきに(気分がますます落ち込んでいる時に)」　*「見する」は他動詞「見す(見せる)」の連体形で<見せるということ>という言い方。*「心地のいとど悪しきに」は、ツワリが苦しいのか、殿の上への執心が情けないのか、密通の露見が恐ろしいのか、それらの複合なのか、分からない。

とて臥したまへれば(と言って宮は見ようとも為さらずに、横になってしまいなさったので)、

「なほ(でも)、ただ(せめて)、この*端書きの(この追い書きが)、いとほしげにはべるぞや(とても切なそうでございますよ)」　*「端書き(はしがき)」は手紙にあっては<追伸>と大辞泉にある。

とて広げたれば(と言って侍従がお手紙を広げると)、人の参るに(誰かが近付いて参るので)、いと苦しくて(とっさに困って)、御几帳引き寄せて去りぬ(目隠しの御几帳を引き寄せて場を離れました)。

いとど胸つぶるるに(とても動揺している所に)、院入りたまへば(殿がお戻りなさったので)、えよくも隠したまはで(宮は手紙を上手く隠し為されずに)、*御茵の下にさし挟みたまひつ(御敷布団の下に差し挟みなさいました)。　*「茵(しとね)」は<敷物。座布団・敷き布団の類。>と大辞林にある。敷き布団、と見て置く。

[第四段　源氏、女三の宮と和歌を唱和す]

*夜さりつ方(部屋にお入りになった殿は、この日の夜になったら)、二条の院へ渡りたまはむとて(二条院にお帰りになるということで)、御暇聞こえたまふ(宮に御別れとなる話を申し上げなさいます)。　*「夜さりつ方」は<夜になったら>なのか<夜になったので>なのか。「夜さり」は<夜になった時分>という連用名詞らしい。問題は「つ方」で、「つ」は格助詞にも見えるが、むしろ、その同根原義とも思える完了の助動詞「つ」の終止形と取りたい。終止形で「方」という体言に付く語用は、辞書に説明は見当たらないが、語感として、仮定完了文型なのだろうと独断する。「方」は<場面、場合>を示すが、話者から見て客観概念を認識している言い方だ。つまり、少し遠い。で、「渡りたまはむ」は未来事象に対する意志文型なので、この「夜さりつ方」はまだ夜になっていない時点での<夜になったら>という仮定構文の言い方であり、より客観性の高い文としては与謝野訳文にある<今夜になれば>のような言い換えを工夫すべきだ。

「ここには(あなたは)、けしうはあらず見えたまふを(そんなに悪くはお見えにならないが)、まだいとただよはしげなりしを(あちらの人はまだとても意識朦朧と頼り無さ気なので)、見捨てたるやうに思はるるも(見放したように思われるのも)、今さらにいとほしくてなむ(今更に哀しいので、見舞いに戻ります)。ひがひがしく聞こえなす人ありとも(あなたには薄情なことだと偏ったことを申す人が居ても)、ゆめ心置きたまふな(決して気に為さいませんように)。今見直したまひてむ(直ぐに分かることですから)」

と語ひたまふ(とお話しなさいます)。例は(いつもは)、*なまいはけなき戯れ言なども(然して情緒も無いながら在り来たりの名残り惜しみ文句くらいは)、うちとけ聞こえたまふを(親しく申しなさるのだが)、いたくしめりて(今日の宮はいやに湿っぽくて)、さやかにも見合はせたてまつりたまはぬを(はっきりと目も合わせ申し上げなさらないのを)、ただ世の恨めしき御けしきと

心得たまふ(殿はこの三角関係を宮がただ恨んでいる御態度だと御考えなさいます)。　*「半幼稚なきたはぶれごと」は<子供っぽい冗談>と訳文があるが、この言い換えには私は少なからず違和感を覚える。どんなに子供っぽくても、いや、そういう素直な無邪気さで、それなりに遊び心を持って洒落た事を考えて言うくらいなら、宮はどんなに魅力的で可愛いことか。まるで幼い日の紫君をも彷彿とさせるような形容だ。しかし、「なまいはけなし」は、素直な無邪気さでもなく、かといって情緒を滲ませる歌詠みをするでもない、かといって女心の寂しさから殿を引き止めるものの、さして表情も変わらずに「寂しいから直ぐに帰って来て下さい」みたいな決まり文句だけは言う、という印象の薄い生半可な態度を言っているのだろう。この「戯れ言」は、愚にも付かない、くらいの言い方で、取るに足らない<つまらないこと>という意味に私には聞こえる。それでも、何も言わないよりは親しさの表現にはなっている、といったところかと思う。

昼の御座に(ひるのおましに、宮の昼の御居間に)うち臥したまひて(横になりなさって)、御物語など聞こえたまふほどに暮れにけり(雑談などをお話し合い為さっているうちに日が暮れました)。すこし大殿籠もり入りにけるに(少し寝入ってしまわれたが)、ひぐらしのはなやかに鳴くにおどろきたまひて(殿はヒグラシ蝉のうるさく鳴くのに目を覚ましなさって)、

「さらば(それでは)、*道たどたどしからぬほどに(遅くなって道の暗さがたどたどしくならないうちに、出掛けます)」　*「道たどたどし」は注に<「夕闇は道たどたどし月待ちて帰れわが背子その間にも見む」（古今六帖一、三七一、夕闇）をの語句を引いた言葉。>とある。この引歌を下敷きに以下の文が語られるようなので必脚だ。「背子(せこ、兄子)」は女が親しい男を呼ぶ語、と古語辞典にある。「その間にも見む」は<その月が出るまでの時間も会っていられるから>という意味だろうか。そう素直に読める気もするが、「かへれ」の語感や「その間」に含みを疑えば、分かったような分からない歌にも思える。で、少しWeb検索すると、この古今六帖の引歌は､元歌が万葉集の巻四709番の「夕闇は道たづたづし月待ちて行ませわが背子その間にも見む」(豊前國娘子大宅女)、であるらしい。「豊前國娘子大宅女」は読みが「とよのみちのくちのくにのおとめ、おおやけめ」とか「とよくにのみちのくちをとめ、おおかけめ」とか紛らわしいが、いずれ子細未詳らしい。で、万葉集の歌の方が親身の情感が有って、古今六帖の方は遊び心のお座敷歌なのだろうかとも思ってみたが、元歌にしてみても古語だし事情背景も知らないし、やはり真意の程は分からない。ただ、此処では情感のこもった歌、と解して置けば以下の文を読み進めそうなので、ともかくは<男を引き止める女の歌>と承知して置く。

とて、御衣などたてまつり直す(と言ってお召し物などを着替えなさいます)。

「*月待ちて(道たどたどしなれば、月待ちて行かせ)、とも言ふなるものを(とも古歌に言ってありますものを、そうお急ぎなさらずとも)」　*「月待ちて」は、「道たどたどし」と源氏殿が情緒を持って振ったであろう、注に示された古歌の引き合いを、宮も読み取ってその風情を受け止めて、その句を踏まえて返した言い方、ということらしい。

と(と宮が)､いと若やかなるさましてのたまふは(とても若々しい様子でお引止めなさるのは)、憎からずかし(憎い筈もありません)｡「その間にも(その月が出るまでの間にも､一緒に居たい)、とや思す(とお思いなのだろう)」と(と殿は)、心苦しげに思して(宮を振り切るに忍び無く)、立ち止まりたまふ(気をお留めなさいます)。

「夕露に袖濡らせとや、ひぐらしの鳴くを聞く聞く起きて行くらむ」（和歌 35-15）

「夜露を誘うひぐらしの声を残して行くあなた」（意訳 35-15）

*注に＜女三の宮から源氏への贈歌。「露」は涙の象徴。「起きて」は「露」との縁語「置きて」を響かす。『集成』は「夕方は尋ねて来て下さるはずの時ですのに、の余意があろう」。『完訳』は「蜩が鳴き露が置く夕べは男が女を尋ね来る時。それなのに立ち去るのだとして、源氏を恨む歌」と注す。係助詞「や」--「行くらむ」連体形は、反語の意を含んだ疑問、恨み言の余意余情がある。＞とある。「ひぐらし」が「日暮し（朝から晩まで一日中）」と「蜩（朝と夕方に鳴くセミ）」に掛ける語用なのは、日暮れに鳴くセミをヒグラシと命名した時点から含意されているのだろう。なお、「蜩」は秋の季語だそうだが、実際は六月から九月ごろまで鳴くようで、まして此処の場面の陰暦六月は晩夏とは言え新暦の七月だから真っ最中だ。結露は湿気を含んだ大気が移動しないまま冷やされた時に飽和水蒸気が、特に急速に冷えた物の表面に凝固する。夕方の結露は放射冷却が進む気圧配置の場合に起こるらしい。ただ、今だと「夕露に袖濡らせ」は聞き慣れない言い方で、多くは＜夜露に濡れる＞と言う。「鳴くを聞く聞く起きて行くらむ」は拙い詠み方という演出のようだが、何だか妙に今風で、むしろ新しささえ感じる。乾いた語感の中に、女を泣かせて去って行く男、が表現されているような印象。

*片なりなる御心にまかせて言ひ出でたまへるもらうたければ（未熟な御心のままにお詠み為さった宮の御歌も健気なので）、ついゐて（座って）、　*「片なり」は＜半人前、未成熟、未熟＞。作者がその心算で設定したらしいこの歌の詠み方が、却って古さを感じさせないのは時代の皮肉か。それとも、以前なら歌を詠むほどの心の起伏も無かった宮が、藤君という比較対照を得たことで、源氏殿に対して訴求心が昂じて、技量などを研ぐ余裕も無いままに歌心を示した、という作者渾身の「片なり」風の演出が、その気概のあまりに意図とは離れて思わぬ表現力を示したのかも知れない。

「あな、苦しや（是は困ったな）」

と、うち嘆きたまふ（と殿は溜息をお吐きになります）。

「待つ里もいかが聞くらむ、方がたに心騒がすひぐらしの声」（和歌 35-16）

「あちらの里のひぐらしはどういう声で鳴くのやら」（意訳 35-16）

*注に＜源氏から女三の宮への返歌。「ひぐらし」の語句を受けて返す。「来めやとは思ふものからひぐらしの鳴く夕暮は立ち待たれつつ」（古今集恋五、七七二、読人しらず）を踏まえる。＞とある。参照歌の「来めや」という言い方は目馴れない。「来（こ）」は自動詞「来（く、来る）」の未然形。「め」は推量の助動詞「む」の已然形。「や」は反語を示す係助詞。こういう変則的な繋がりの「来めや」は、ほぼ定句で＜来ないだろうな＞という意味らしい。この古今集の歌が「待つ里」とは、二条院に居る紫の上の心境だということだろうか。だとしたら、ずいぶん背負った歌詠みだ。いや、そうと決め付けたものではないとしても、如何にも二枚目気取りというか、「方がた」を慮る源氏殿の自意識が、「方がた」に殿が本当に期待されているものを分かっていないようで、どうにも過剰に思えてしまう。自分は思い遣りを示した心算でも、的外れな尊大さばかりが目立つ、というのは結構な道化ぶりだ。少なくも、宮に対して、その気持に誠実に応えようという姿勢は感じられない。傍観者風の変な返歌だ。

など思しやすらひて（などと言って躊躇なさって）、なほ情けなからむも心苦しければ（宮に対しても薄情になるようなのも忍び無いので）、止まりたまひぬ（その夜は六条院に止まりなさいました）。静心なく（とは言え腰を落ち着ける気分ではなく）、さすがに眺められたまひて（やはり紫

の上が案じられなさって沈みがちで)、御くだものばかり参りなどして(お菓子類だけを召し上がって)、大殿籠もりぬ(お寝みなさいました)。

［第五段　源氏、柏木の手紙を発見］

まだ*朝涼みのほどに渡りたまはむとて、とく起きたまふ(まだ朝の涼しいうちに二条院にお帰りなさろうということで、殿は早くお起きなさいます)。　*「朝涼み」は＜夏の朝の涼しい頃＞と古語辞典にある。対語の「夕涼み」は今でも良く使うが、「朝涼み」は体が動き易い時間というのは分かるし、今でも使うこともあるような気もするが、夕方の仕事終りの開放感に比べて、朝の支度の忙しなさは、「涼む」という語感に馴染み難くも見える。どこか貴族の優雅さが漂う。

「昨夜の*蝙蝠扇を落として(よべのかはほりをおとして、昨夜使っていた扇子を何処かへ置き忘れて)、これは風ぬるくこそありけれ(この桧扇では風が弱くて暑いな)」　*「蝙蝠扇」は＜かはほり＞とあり＜かはほりあふぎ＞の日常的な呼称、らしい。注には、此処の文意は＜源氏の独言。「かはほり」は夏扇。「これ」は桧扇をさす。＞とある。「かはほり」が木の骨に紙を貼り付けた今で言う＜扇子＞で、広げた形状が「かはほり＝蝙蝠」に似ていることからの呼称、とのこと。「ひあふぎ」は薄くて細い檜板を何枚か重ね束ねて端に絹糸を通して綴じたものとのことで、その綴じた端を要にして広げれば＜扇子代わり＞にはなるものの、本来の用途はメモ用紙だったとか。なお、「コウモリ」に「偏福」という御目出度い字が当てられるのは、「コウモリ」を吉祥獣とする中国思想による、とか言う説明もどこかで見た気がする。それで、夏扇を「かはほり」と言うことに抵抗感が無いのかも知れない。今でも、特に黒い傘をコウモリ傘と言うが、それはそれで愛嬌のある言い方には聞こえる。が、西洋では吸血鬼と嫌われる、とも Wikipedia にあり、私もコウモリは不気味な様態に見える。今では全く目にしないが、30 年位前までは、夏の夕方に群れて飛ぶコウモリを良く見かけた。遠くで飛んでいる分には、それなりの風情に思えもするが、動物園なり図鑑なりで近くに見ると異様だ。

とて、御扇置きたまひて(と言ってその御扇を置きなさって、帳台を出て)、昨日うたた寝したまへりし御座のあたりを(昨日うたた寝をしてしまいなさった宮の昼の御居間あたりを)、立ち止まりて見たまふに(探して御覧になると)、御茵のすこし*まよひたるつまより(敷布団の少し雑然としている端から)、浅緑の薄様なる文の(浅緑色の薄紙の手紙が)押し巻きたる端見ゆるを(巻き収められた端が見えるのを)、何心もなく引き出でて御覧ずるに、男の手なり(何気なく引き出して御覧になると、その手紙は男の筆跡でした)。　*「まよふ」は＜乱れる＞と古語辞典にある。

紙の香などいと艶に(紙の香などとても優雅で)、ことさらめきたる書きざまなり(特に気を配ったような丁寧な書きっぷりです)。二重ねにこまごまと書きたるを見たまふに(二枚にわたってこまごまと書いてある筆跡を御覧になると)、「紛るべき方なく、その人の手なりけり(紛れも無く衛門督その人のものだ)」と見たまひつ(と殿はお思いになります)。

御鏡など開けて*参らする人は(近くで殿の身支度の為に、御鏡の蓋を開けて用意して差し上げている女房は)、見たまふ文にこそはと(殿が御覧になっている手紙は、御所用の御連絡に違いないと)、心も知らぬに(気にもしないが)、小侍従見つけて(小侍従はその殿の御姿を見つけて)、昨日の文の色と見るに(昨日の衛門督の手紙の色だと分かると)、いといみじく(本当に深刻に)、胸つぶつぶと鳴る心地す(動揺が抑えられません)。御粥など*参る方に目も見やらず(御粥などの

配膳に気が回らず手も止まり)、　＊「参らする」は<貴人に何かをして差し上げる>という謙譲語、と古語辞典にある。「まゐる」ことを「する」という言い方のようで、話者から見て遠い客観的な表現に見える。　＊「参る方」の主語は小侍従なので、この「まゐる」は<奉仕する>という意味の他動詞で、「参る方」は<給仕すること>なのだろう。

「いで、さりとも、それにはあらじ(いや、いくらなんでも、そんなことはないだろう)。いといみじく(それはとんでもなことで)、さることはありなむや(そんな事が有ろう筈がない)。隠いたまひてけむ(宮は手紙をお隠しなさったのだ)」

と思ひなす(と思うことにします)。

宮は、何心もなく、まだ大殿籠もれり(宮は無心にまだお眠りになっていました)。

「あな、いはけな(何と幼い)。かかる物を散らしたまひて(こんな大事な物を放り出したままになさって)。我ならぬ人も見つけたらましかば(私以外の女房などが見つけたかも知れないではないか)」

と思すも(と殿はお思いになるも)、＊心劣りして(宮の密通には落胆して)、　＊「心劣り」は<期待はずれ>と大辞泉にあり、大辞林には「心勝り」の対語として<見劣り>とある。ただ、是は何に対しての殿の評価なのか。宮が手紙の始末が悪いことに対しては、「あな、いはけな」とその未熟さを低評価したことが既に語られている。その上で、「思すも」と逆接で話を続けているのなら、同様の手紙の始末の悪さに対しては、その無邪気さが<可愛い>とかいう逆の高評価が述べられて然る可きだ。が、「心劣りし」と別の低評価が語られている。ということは、「思すも」の「も」は<もう一方の>別の対象について話を続ける区切りまたは間合いの接続助詞というべきものであって、その別の話題とは手紙の内容から知れた<宮と衛門督との密通>に違いない。であれば、この「心劣り」は<期待外れ、見劣り>では軽過ぎる表現の事態に思え、裏切られたことに<落胆する>と読んで置く。

「さればよ(案じていたのだ)。いとむげに心にくきところなき御ありさまを(あまりにひどく配慮の足りない宮の御言動を)、うしろめたしとは見るかし(心配に思っていたのだが)」

と思す(とお思いになります)。

[第六段　小侍従、女三の宮を責める]

出でたまひぬれば(殿がお帰りになったので)、人びとすこしあかれぬるに(女房たちが少し宮のお側を離れた時に)、侍従寄りて(侍従が近付いて)、

「昨日の物は(昨日の手紙は)、いかがせさせたまひてし(如何あそばしましたか)。今朝、院の御覧じつる文の色こそ、似てはべりつれ(今朝、殿が御覧になっていた手紙の色が、それに似ていましたが)」

と聞こゆれば(と申し上げると)、＊あさましと思して(宮は殿が手紙を見つけたという都合の悪さに驚いて)、涙のただ出で来に出で来れば(涙をただただ流すばかりで)、いとほしきものから

(哀れには見えたが)、「いふかひなの御さまや(わかっていない御人だ)」と見たてまつる(と思い申し上げます)。　*「あさまし」は＜意外だ、驚くべきだ、あきれる、なさけない＞と古語辞典にある。「浅む」には＜露わになる、むき出しにする＞みたいな語感があって、この「あさまし」を＜密通の露見＞かとも思ったが、また実際に露見してしまったのだが、宮は密通の露見がどういう事態を引き起こすか、ということにさえも然程は思いが巡らないらしく、ただ単に殿に叱られるのを恐れていたようなので、思っても居なかった殿の手紙の発見、ということ自体の不始末に宮は即物的に驚いた、と言っているのだろう。

「いづくにかは、置かせたまひてし(何処に置いていらっしゃったのですか)。人びとの参りしに(他の人たちが来たので)、ことあり顔に近くさぶらはじと(私が訳有り顔で近くに居りましては変に勘ぐられるかと、下がりましたように)、さばかりの忌みをだに(私はそうした、ちょっとした危惧でさえ)、心の鬼に避りはべしを(気をつけて避けておりましたのに)。入らせたまひしほどは(殿がお部屋にお戻りなさったのは)、すこしほど経はべりにしを(それから少し時間が経ってからでしたので)、隠させたまひつらむとなむ(私はてっきり宮様が手紙を、お隠しあそばしたものと)、思うたまへし(思っておりました)」

と聞こゆれば(と小侍従が申せば)、

「*いさ、とよ(それがね)。見しほどに入りたまひしかば(手紙を読んでいる時に殿がお部屋にお入りになったので)、ふともえ置きあへで(直ぐには仕舞えずに)、さし挟みしを(布団の下に挟んで隠したのを)、忘れにけり(忘れていたの)」　*「いさ、とよ」は＜いえ、それはこういうことよ＞とか＜いやそれは、こういうことなのよ＞という言い方のようだが、「いさ」が事改めてものを言う発語であり、「とよ」が念押しの強調語と見れば、ほぼ定句で＜それがね、それでね＞という意味で使われていると見做せそうだ。

とのたまふに(と宮が仰ることに)、いと聞こえむかたなし(小侍従は何とも応答のしようもありません)。寄りて見れば(探して見ても)、いづくのかはあらむ(何処にも在る筈が有りません)。

「あな、いみじ(これは大変です)。かの君も(あの方も)、いといたく懼ぢ憚りて(それはとても恐れ用心して)、けしきにても漏り聞かせたまふことあらばと(素振りにも密通を殿が漏れ聞きなさる事が有ってはならないと)、かしこまりきこえたまひしものを(緊張していらっしゃったものを)。ほどだに経ず(こんなに早く)、かかることの出でまうで来るよ(このように露顕してしまうとは)。

*すべて、いはけなき御ありさまにて(何ごとにも思慮の足りないあなた様のお振る舞いに拠って)、*人にも見えさせたまひければ(相手の人の衛門督にも御姿を見させなさったことで)、年ごろさばかり忘れがたく(数年来その事が忘れられず)、*恨み言ひわたりたまひしかど(督があなたにもう一度御会い申したいとの、恋の執心を言い続けていらしたので、私が仲を御取り持ち申しましたが)、*かくまで*思うたまへし*御ことかは(それが恋文で密通が露顕するなどという、こんな愚かしい事態になると存じていた御好事だったでしょうか)。誰が御ためにも、いとほしくはべるべきこと(誰の御ためにも残念なことです)」　*「すべて」は＜総じて、大体が＞という言い方で文全体に掛かるのか、「いはけなし」を＜全く、何ごとも＞と強調しているのか。私は後者と見る。どちらにしても、宮に対して遠慮の無い罵倒だ。　*「人にも見えさせたまひければ」は注に＜六年前に六条院での蹴鞠の折に柏木に姿

を見られたことをいう。＞とある。　*「うらむ」は＜嘆く＞。「言ひわたりたまひし」の主語は藤君。だから「嘆き」は、一度見掛けた宮に再度会えない＜恋の執心＞。「かど」の下には＜御取り持ち仕りましたのに＞くらいが省かれているのだろう。よくある省略かも知れないが、責任回避の心理も感じる。　*「かくまで」は、この宮の不注意で藤君との密通が源氏殿に知られてしまったこと、を指している、と読んで置く。　*「思うたまふ」の「たまふ」は会話での自分の動作を聞き手に対して謙譲して言う補助動詞、なのだろう。「思う」の「う」は、「思ふ」の連用形「思ひ」の「ひ」が「たまふ」に続く時の音便だろうか。良く分からないが、以前にも見た気がする。　*「御こと」は、少なくも小侍従の判断では、建前はともかく、今を生きる若者として藤君には勿論、宮にとっても情事は＜御好事＞に違いない、と恐らくは自分の実体験から考えた、のかと思う。此処の行は難文だ。

　と（と小侍従は）、憚りもなく聞こゆ（宮に遠慮も無しに申し上げます）。*心やすく若くおはすれば（小侍従は乳母子という親しい間柄で宮が若くていらっしゃるので）、馴れきこえたるなめり（気安く申し上げるようです）。いらへもしたまはで（宮は応えも為さらず）、ただ泣きにのみぞ泣きたまふ（ただ泣き暮れていらっしゃいます）。いと悩ましげにて（とても体調が悪そうで）、つゆばかりの物もきこしめさねば（少しも食事を召し上がらないので）、　*「心やすく若くおはすれば」は注に＜『集成』は「小侍従は女三の宮と乳母子という親しい間柄でもある。＞とある。

　「かく悩ましくせさせたまふを（このように宮が不調でいらっしゃるのを）、見おきたてまつりたまひて（拝し申し上げなさったというのに）、今は*おこたり果てたまひにたる御扱ひに（今は全快なさった方の御看病に）、心を入れたまへること（殿は熱心でいらっしゃること）」　*「おこたる」は＜漫然とする→何事も無い→病気が回復する＞という連想で良いのだろうか。「おこたり果つ」は＜全快する＞と古語辞典にある。紫の上は小康ではあっても、全快とは言えない状態だろうに、宮付きの女房が宮への贔屓目で言った厭味らしい。

　と、つらく思ひ言ふ（と宮の女房たちは殿を薄情に思い言います）。

[第七段　源氏、手紙を読み返す]

　大殿は、この文のなほあやしく思さるれば（源氏殿はこの手紙が尚も疑問に思われ為されて）、人見ぬ方にて、うち返しつつ見たまふ（女房に見られないようにして、何度も読み返しなさいます）。「さぶらふ人びとの中に（宮に側仕えする女房たちの中の者が）、かの中納言の手に似たる手して書きたるか（あの中納言の字に似せて書いた悪戯の手紙だろうか）」とまで思し寄れど（とまでお考えになったが）、言葉づかひ*きらきらと（物の言い方が藤原家らしく率直で）、まがふべくもあらぬことどもあり（紛れなくそれと思える文が数々ありました）。　*「きらきらし」は＜派手に美しい、きらびやか＞とか＜堂々と威儀がある＞などと古語辞典にある。が、この言い方では何のことを言っているのか私には分からない。だから、逆に藤君らしい特徴を考えて、この「きらきら」に当てはめてみる。

　「年を経て思ひわたりけることの（長年思い続けてきた恋慕が）、*たまさかに本意かなひて（稀な機会の情交で胤付けを果たせて念願叶って）、*心やすからぬ筋を書き尽くしたる言葉（興奮している心情を多くの言葉で書き尽くしてある文面は）、いと見所ありてあはれなれど（とても見応えがあって情に訴えるが）、いとかくさやかには*書くべしや（密通という事情を考えれば、これほどはっきりと書いて良いものではない）。　*「たまさか」は＜偶然＞というよりは＜稀な機会＞。「本意（ほ

い)」は藤君の＜本懐＞であり、その「本懐」とは王家腹への胤付けであり、藤君は小侍従から宮の懐妊を知らされて喜んでいたのだろう。また敢えて言えば、藤君の核心的興味は宮の好意を勝ち取ることではなく、絶対的な拒否や激しい抵抗無しに情交を果たせば自分が認められたことになるのであり、その心情は見方によっては藤原家長子の重圧を滲ませていたかも知れず、それが「言葉づかひきらきらと」していたのかも知れない。　*「心やすし」は＜心が穏やか、安寧＞。「心やすからぬ筋」は＜興奮した文面＞。　*「書くべしや」の「べしや」は＜良いのだろうか＞という疑問や疑問風の柔らかい反語ではなく、強く＜良いものではない＞と断じている反語に聞こえる。

　あたら人の(惜しいことに藤の中納言ほどの人が)、文をこそ思ひやりなく書きけれ(こんな手紙を分別も無く能くも書いたものだ)。*落ち散ることもこそと思ひしかば(何処で誰の目に触れるか知れないと思ったので)、昔、かやうにこまかなるべき折ふしにも(昔このようにこまごまとした事情があるときにも)、ことそぎつつこそ書き紛らはししか(私は言葉を出来るだけ少なくして書き紛らわしたものだが)。人の深き用意は難きわざなりけり(彼には深い用心は出来ないもののようだ)」　*「落ち散る」は手紙を花に準えた表現だろうか。枝にある花は勝手に取ることは出来ないが、落花したものなら誰でも手に取れる、みたいなことだろうか。訳文に此処の文意は＜人目に触れることがあってはいけないと思ったので＞とあり、大意は従いたい。

　と(と殿は宮の幼さに加えて)、かの人の心をさへ見落としたまひつ(藤君の浅慮まで見下しなさいます)。

[第八段　源氏、妻の密通を思う]

　「さても、この人をばいかがもてなしきこゆべき(それにしても、この人を如何処遇申したものだろうか)。*めづらしきさまの御心地も(お目出度らしい宮の御加減も)、かかることの紛れにてなりけり(こうした中納言との密通の思いがけない結果ということだ)。　*「めづらし」は＜愛でるべき、目出度い＞ということだから、「めづらしきさま」は＜お目出度のような様子＞。「みここち」は＜御加減、御体調＞。「まぎれ」は＜他の事に入りまじって起きる思いがけないこと。まちがい。＞という名詞とも大辞林にあるが、「まぎれに」で＜感情のままに、勢いのままに＞という副詞的な語用の説明もあり、望ましくない＜起きてしまった不祥事＞という語感だ。「にてなりけり」は＜だったということだ＞という言い方。

　いで、あな、心憂や(いや何とも厭なことだ)。かく、人伝てならず憂きことを知るしる(このように人伝ではなく直に不祥事を知りながら)、*ありしながら見たてまつらむよ(以前どおりに御世話申すことになるのか)」　*「ありしながら」は＜昔ながら、もとのまま＞と古語辞典にある。なお、「知る知る(知りながら)」が＜知りつつも、一方では＞という逆接意なので、「らむよ」の予測強調語法が＜することになるのか＞という反語表現になる。本文の「ながら」と訳文の＜ながら＞が妙に紛らわしい。

　と(と殿は)、わが御心ながらも(自分の気持次第ながらも)、え思ひ直すまじくおぼゆるを(とても気を取り直して元通りに持て成す事は出来ないと思えるにつけても)、

　「なほざりのすさびと(その場限りの遊びと)、初めより心をとどめぬ人だに(初めから深く思っていない女でさえ)、また異ざまの心分くらむと思ふは(他の男に心移りしていそうに思えば)、心づきなく思ひ隔てらるるを(気に入らずに相手にしたくなくなるのに)、ましてこれは(増して

この人は)、さま異に(特別な妻だと言うのに)、おほけなき人の心にもありけるかな(大それた中納言の考えではあったものだ)。

*帝の御妻をも過つたぐひ(帝の妃とも臣下が過ちを犯す例は)、昔もありけれど(昔にもあったが)、それはまたいふ方異なり(それはまた事情が違うものだ)。　*注に＜『河海抄』は在原業平と五条后や二条后の例、花山院女御と藤原実資や藤原道信、源頼定と三条院麗景殿女御や一条院承香殿女御との例を指摘。光源氏自身、桐壺帝の藤壺女御と過ちを犯している。＞とある。

*宮仕へといひて(宮仕えということで)、我も人も同じ君に馴れ仕うまつるほどに(男も女も同じ主君に親しく仕え申す内に)、おのづから(自然に)、さるべき方につけても(男女の仲についても)、心を交はしそめ(心を交わし始めて)、もののまぎれ多かりぬべきわざなり(ものの弾みの不祥事が多くなってしまうものだ)。　*注に＜女性が入内することも男性が官僚として仕えることも共に「宮仕え」といった。帝との結婚も「宮仕え」なのであった。「同じ君に馴れ仕うまつるほどに」という状況は、桐壺帝の下での源氏と藤壺女御との関係によく似ている。＞とある。

女御、更衣といへど、とある筋かかる方につけて(女御、更衣と言っても考え方や性格に於いて)、かたほなる人もあり(不十分な人もいて)、心ばせかならず重からぬうち混じりて(思慮が必ずしも深くない所があって)、思はずなることもあれど(思いがけない不義が起こることがあるが)、*おぼろけの定かなる過ち見えぬほどは(特にはっきりした不始末が表に出ない内は)、さても交じらふやうもあらむに(そのまま後宮社交を続けることもあるようで)、*ふとしもあらはならぬ紛れありぬべし(結局は表沙汰に成らなかった密通もあったことだろう)。　*「おぼろけ」は分かり難い語だが、ざっと＜普通のさま＞を言うらしい。が、此処では＜普通に＞「定かなる過ち(はっきりした密通の証拠)」という言い方になって、意味を成さない。で、「おぼろけ」は「おぼろけ」という言い方で「おぼろけならず(普通ではないさま、重大な、特別な)」の意味になる、という古語辞典の説明が役立つ。　*「ふとしも」は＜急には、直ぐには＞と古語辞典にある。が、「ふと」には＜急に、不意に、図らずも＞の他に＜たやすく、簡単に＞という語用もあって、「ふとしも」を＜必ずしも簡単には＞と取れば、「ふとしもあらはならぬ紛れ」は＜実は簡単には露顕しなかった密通→結局知られなかった密通＞と取れそうだ。

*かくばかり(このように宮を)、またなきさまにもてなしきこえて(またとないほどに手厚く持て成し申し上げて)、*うちうちの心ざし引く方よりも(内実で愛情を寄せている紫の上よりも)、いつくしくかたじけなきものに思ひはぐくまむ*人をおきて(大事にお世話し丁重に接すべき人と思って守っている私を差し置いて)、かかることは、さらにたぐひあらじ(このような不始末は全く例えようも無く罪深いものだ)」　*「かくばかり」は「もてなしきこえて」という敬語遣いなので、対象は女三の宮らしい。　*「うちうちの心ざし引く方」は＜紫の上をさす。＞と注にある。　*「人」は＜自分光源氏をさす。＞と注にある。いちいち分かり難い省略や曖昧な代名詞表現の文だ。

と、*爪弾きせられたまふ(と不快に思いなさいます)。　*「つまはじき」は＜人さし指や中指を親指の腹に当て、強くはじくこと。嫌悪・軽蔑・非難などの気持ちを表すしぐさ。＞と大辞泉にある。不快感を表わす仕種や表現、ということなのだろう。辞書には仏教用語の「弾指(だんし)」という＜合図＞や＜短時間＞を示す語が元になっているような説明もあるが、直感的に＜つまらないこと＞や＜消え失せろ＞を示す所作に見える。

「帝と聞こゆれど（相手先が天皇と申し上げても）、ただ素直に（ただ従順に）、公ざまの心ばへばかりにて（公式行事を型通りにだけ）、宮仕へのほどもものすさまじきに（お仕えすることも物足りないので）、心ざし深き*私のねぎ言になびき（妃が好意を深く訴える同僚の男の個人的な求愛に応えて）、おのがじしあはれを尽くし（お互いに情熱を高めあって）、見過ぐしがたき折のいらへをも言ひそめ（見捨てて置けなくなって手紙の返事も書き出して）、自然に心通ひそむらむ仲らひは（次第に恋仲になる男女関係は）、同じけしからぬ筋なれど（今回の密通と同様に不都合な話だが）、*寄る方ありや（まだ同情の余地がある）。わが身ながらも（この私を差し置いて）、さばかりの人に心分けたまふべくはおぼえぬものを（中納言ほどの者に宮が浮気なさろうとは思えないのだが）」　*「わたくしのねぎごと」は＜私的な願い事＞という言い方らしいが、「宮仕へ」に対比させたものなのだろうか、こういう言い方をする意図が私には分からず、単に変な言い方に見える。　*「寄る方ありや」は、自分の妻の密通より帝妃の密通の方がまだマシだ、というとんでもない身贔屓の殿の発言だ。

と、いと心づきなけれど（と殿は心外だったが）、また（その反面）「けしきに出だすべきことにもあらず（その不満を表に出すべきでもない）」など、思し乱るるにつけて（などと思い乱れなさるにつけて）、

「故院の上も（故父院も）、かく御心には知ろし召してや（このように私と中宮との密通を御心中にはご存知であって）、知らず顔を作らせたまひけむ（気付かぬ顔をお作りになっていたのだろうか）。思へば（そうだとすれば）、その世のことこそは（その時のことは）、いと恐ろしく（本当に恐ろしく）、あるまじき過ちなりけれ（決して許されない過ちだったのだ）」

と、近き例を思すにぞ（と身近な例をお思いになると）、*恋の山路は（他人の深い恋路を）、え*もどくまじき御心まじりける（とても非難できないお気持にもなります）。　*「恋の山路」は注に＜明明融臨模本、合点あり、付箋に「いかはかり恋の山路のしけゝれはいりといりぬる人まとふらん」（古今六帖四、一九七四）とある。＞とある。　*「もどく」は＜似せる、真似る＞で、転じて＜取り上げて非難する＞の意味にも使う、と古語辞典にある。